

PICK UP!!

岐阜大学山岳部

# 未踏峰

未踏峰 Ziya Madin (ジャ・マディン) 峰

北緯 27度44分02.9秒

東経 97度00分57.2秒

4112m

# 登頂。

2011年12月28日。岐阜大学山岳部の遠征隊が、ミャンマーの未踏峰ジャ・マディン峰(標高4,112m)に初登頂。1994年以来となる海外遠征の成功は、廃部寸前にまで追い込まれていた山岳部復活のスタートでもあった。その歴史的な未踏峰への挑戦と山岳部の今後についてお話を伺った。



工学部3年  
伊藤 翼

山岳部主将。父の影響で幼い頃から山登りを経験。今回、未踏峰の山頂に立った。



応用生物科学部3年  
森 脩祐

山岳部員。登山を始めたのは大学から。キャリア2年で未踏峰へ挑んだ。



岐阜大学名誉教授  
藤井 洋

山岳部前顧問。2003年に退職後も、山岳部の指導と支援に尽力している。

岐大山岳部を復活させた、  
ミャンマー未踏峰への挑戦。

2011年12月17日に出発した遠征隊。プータオから奥地へ入って頂上を目指し、12月28日14時05分に見事登頂に成功し、2012年1月11日に無事帰国しました。  
山岳部OBをはじめ、たくさんの方たちのご助力もあり、無事に帰国してきた山岳部の伊藤さんと森さん。大きな経験をつんだ彼らが牽引する今後の山岳部の活動に目が離せない。



# 山岳部復活

過酷な試練が続いた、  
山頂への道のり。

——遠征隊のメンバーは？

伊藤 僕と森くん、藤井先生とOBの鰐部隆義さんの4名です。

藤井 私と鰐部くんはベースキャンプ(標高2400m地点)に残り、山岳部員の2名が山頂をめざしました。

——この挑戦で、苦労したこと  
は？

伊藤 目標にしていた4320mの山が実際には存在しないことが直前になって判明し、現地入りしてから変更するなどバタバタのスタートでした。

藤井 未踏なのでもちろん地図はなく、衛星写真を繋ぎあわせてオリジナルの地図を作りました。なので、直前になって「この道が違う」とか大変でしたね。

とにかく情報が少ないので試行錯誤でした。

森 下痢も大変でした。山に入る直前から3〜4日続き、ベースキャンプに到着した頃ようやく治って。

伊藤 そうそう、首からトイレットペーパーをぶら下げるくらいひどかった(笑)食欲があったのが救いでしたね。

森 道のない溪谷の川を歩いたり、5m先も見えない状態のジャングルを歩いたり、ハンターでもあったポーターには道案内でも随分助けられました。

——山頂へのアタックでは厳しい決断を迫られたのでは？

伊藤 天候が崩れはじめていたので急ぐ必要があり、28日午前7時に山頂アタックを開始しました。

森 衛星写真と状況が違ったため、インド側に迂回するなど



森 13時15分、残り標高150mというところで断念しました。体力が限界でしたし、技術的にも難しいと判断したからです。無理はしませんでした。

伊藤 離れて行動するのは危険なので苦渋の選択でしたが、ポーターも2名いたので、登頂と下山の2チームに分かれました。森くんのも心配だったし、一人で山頂をめざす不安もありましたが、「バックアップしてくれたOBの期待を裏切れない」という気持ちに後押しされましたね。

——そして14時5分、登頂に成功。その瞬間のお気持ちは？

伊藤 達成感はありませんが、同時に「懸垂下降で滑落しないか」「またあのナイフリッジを歩くのか」と下山について考える冷静な自分もいました。

——無事、ベースキャンプに戻った時の心境は？

伊藤 ようやくホッとしたというか。感情を押し殺し「冷静でいなくては」という緊張感から解放されたせいかな、思わず涙が溢れてしまいました。

森 先生も泣いていたので、僕たちも泣けてきちゃって。

藤井 心配で心配でしょうがなかったですからね。今でも、2人の無事な顔を見たことを思い出すと、涙がでますよ。何よりでした。

**名門復活を経て、新生・岐大山岳部へ。**

——未踏峰挑戦を終えて、今後の目標は？

伊藤 とにかく成功してホッとしています。今回の登頂は、OBにとっても山岳部復活の希望でしたから。でも、本当に厳しかった。もう一回登れと言われても嫌です(笑)

森 これからも山登りを続けたい、と思えるいい経験になりました。

伊藤 装備を軽量化して短期間で登山する「ライト&ファスト」というスタイルが生まれるなど、登山は以前よりスポーツ的な側面も色濃くなっています。しかし、安全管理という本質は変わりません。その本質をしっかり学んで受け継ぎ、新旧の価値観を認め合いながら、新しい風を山岳部に取り入れていきたいと思っています。山だけでなく、自然という大きな視野で活動の幅を広げて活動していきたいですね。



### 元岐阜大学学長 今西錦司先生に捧ぐ

岐阜大学の遠征登山を語るにあたって、今西錦司元岐阜大学学長をおいて語ることはできません。そこで、今回ミャンマー隊を率いた藤井洋名誉教授から、在りし日の今西先生のお話を伺いました。

——時は1968年、昭和43年1月。大学紛争真っ盛りの時代であり、岐阜大学はキャンパスの統合を目指して全学部こぞって激烈な議論を交わしている最中。私が岐阜大学に赴任したのがちょうどこの頃。当時27歳でした。その時、岐阜大学学長を勤めていらっしゃったのが今西錦司先生でした。

私が学長室を訪ねた際、「ああ、君のことは平吉さん(平吉功教授)や平林さん(平林芳夫教授)から聞いてた。あんな、岐阜大学の山岳部は45年の歴史がある立派な山岳部なのやがな、海外遠征はまだ1度もやっとな。君、やってみるか」。これが岐阜大学遠征登山の始まりとなった一言でした。

實力に応じた計画を作って持てこいという指示を受け、当時まだ日本人が誰も入ってなかったアフガニスタンのワハン回廊に入り、そこからさらに支流のベギッシュ谷を詰め、氷河上部の6,000m級の未踏峰に登る計画書を持って行きました。「これは良

い計画やな、わしも昔からワハン渓谷には注目しとったんや。よしこれでい。わしのできることは、なんでもやるで」というのが、今西先生のお返事でした。普通、私のできることはなんでもやるというのは、何もやらないというのとほとんど同義。しかし、今西先生の「なんでもやるで」はそれとは違い、遠征のイロハを手取り足取り教えていただけというものでした。そして、平林芳夫(当時教授)を隊長とし、鈴木延隆OBを登攀隊長とする遠征隊を組織し、翌1969年夏、アフガニスタンに出発したのです。隊員の誰も飛行機なんてものに乗ったことはありませんでした。

遠征隊は1969年6月中旬に出発し、7月中旬ベギッシュゾムおよびコーイ・ファルザンド2座の初登頂に成功しました。今西先生はこのほか喜んでくださり、お世話になった岐阜乗合自動車株式会社の竹田直会長とともに盛大な祝賀会を開いてくださいました。

今西先生には、先生が学長を退かれてからも、数多くの山行きにご一緒させていただきました。しかし、90歳も近づいてこれるとだんだん目が不自由になり、ご自身の研究や著作の執筆が続けられなくなりました。それでも山に登ることはやめられませんでした。細い杖を手に持って、『これはわしの触覚なんや』と言って、山を歩かれました。残雪のブンゲン山(伊吹山地に位置する射能山)に登ったときも、頂上で大いに飲み、語り、歌い、そのため最後の雪の急傾斜を下るころには陽がとっぷりと暮れてしまいました。このときにも、『わしには関係ない。どうせ下りは見えへん』と笑っておられました。その頃ご一緒させていただいた私達は、そこに不屈のバイオニアの姿を見ていたのです。

今西先生はその後もまもなく1992年、多くの人に惜しまれながらこの世を去りました。御年90歳でした。

——それからちょうど20年。存亡の危機に陥っていた岐阜大学山岳部の快挙“ミャンマー未踏峰ジャ・マディン登頂”。今は亡き今西先生ですが、きっとどこかの山でっぺんで、杯を片手にニコニコ笑って喜んでくださっているに違いありません。

岐阜大学名誉教授 藤井 洋

